E-6

日本語の wh 構文の考察：島の制約と wh 句の構造[1]

中島優

1. はじめに

本稿の目的は以下の二つである。一つは、素性照合の分析と比較しながら、日本語の wh 構文には無差別束縛が関与していることを示すことであり、もう一つは、複合名詞句制約における wh 項と wh 付加詞の非対称性は、wh 句の構造に起因すると示すことにある。

2. 理論的背景

wh 構文を扱う代表的な理論的立場は、素性照合と無差別束縛であると言える。前者では、wh 句が C(omplementizer)と局所領域において照合を行うために、CP の指定部へと移動し、Q 素性のもとで照合を行う。Huang(1982)以来、wh 句が移動しない日本語では、LF で wh 句が CP へ移動すると仮定されている(Lasnik & Saito1984 他)。[2] Huang(1982)の提案における重要な点は、wh 句が移動する英語タイプの言語と wh 句が移動しない日本語・中国語タイプの言語の違いを、移動が生じるレベルの違いに帰着させることにもあった。

広く知られているように、素性照合の分析におけるメリットの一つは、wh 句に関する局所条件を Rizzi(1990)の相対的最小性のもとで捉えられることにある。(1)が(2)とは異なり、wh 疑問文として解釈できないのは、埋め込み文の Q 形態素の方が、主文のそれよりも wh 句と構造上近いためである。

(1) ジョンは[メアリーがその店で何を買ったか]言ったの?
(2) ジョンは[メアリーがその店で何を買ったと]言ったの?

他方、LF 移動以外で in-situ の wh 句がスコープを取る手段として無差別束縛が提案されている(Pesetsky1987 他)。(1)と(2)の解釈の違いから明らかであるように、日本語では、Q 形態素の位置に応じて wh 句のスコープが決まるため(Nishigauchi1990 他)、Q 形態素が wh 句を無差別束縛していると言う仮説が成り立つ。[3]

---

[1] 本稿に関する内容にコメントを下さった久野正和氏に謝意を表したい。本稿の不備は言うまでもなく著者のみの責任である。
[2] 近年における wh 構文と素性照合に関する分析は Saito(2004)などを参照されたい。
[3] 無差別束縛と wh 句の関わりについては Nishigauchi(1990)や Tsai(1994)などを参照されたい。

3. 問題点

本稿は無差別束縛の立場を取るため、提案に移る前に、まず簡単に素性照合における問題点を指摘したい。Chomsky(2000)では、移動を伴わない形での素性照合が可能になったことから、LF 移動は破棄された。この文法モデルを踏襲すると、wh 句が LF 移動でスコープを取ることは許されない。残る可能性は、Q 形態素との照合のみで wh 句がスコープを取ることであるが、これは局所条件の観点から排除される。近年、局所条件は Phase Impenetrability Condition(PIC)として Chomsky(2000)が定式化した。概略を述べると、相(phase)の一部は循環的にインターフェイスに転送され、転送された箇所はその後の統語演算の対象にならない、と言うものである。PIC に従えば、wh 句が目的語である場合、相である *v*P の完成に伴い、それを含んだ VP は転送されるため、Q 形態素と wh 句の照合はそれに反してしまう。[4] 英語のように wh 句が相の端(edge)へ移動することで PIC を回避する方法は、PF で発音されるコピーが構造上最上位のものでなければならない以上(Chomsky2013 他)、wh-in-situ である日本語には適用できない。

また、仮に LF 移動を許したとしても、素性照合は下記の wh 項と wh 付加詞の複合名詞句制約に関する非対称性を捉えることができない。[5]

(3) [[太郎が何を手に入れた]こと]をそんなに怒っているの?
(4) *[[太郎がなぜそれを手に入れた]こと]をそんなに怒っているの?

(3)と(4)において、スコープのために、wh 句が主文の CP へ LF で移動する際, どちらの wh 句も複合名詞句から出るため、(3)と(4)では容認度に差が出ないはずである。この島の制約に関する非対称性は、従来 Empty Category Principle(ECP)によって捉えられたが(Huang1982 他)、ミニマリストプログラムでは統率(government)の概念が破棄されたため、別の説明が必要となる。

4. 提案

4.1 局所条件と無差別束縛

無差別束縛では 3.に挙げた問題は生じない。まず PIC と局所条件であるが、無差別束縛はシンタクスのレベルで適用される操作ではないため、統語演算を規制する

[4] 同様の問題提起は、埋め込み文の観点から渡辺(2005)でもなされている。
[5] (3)と(4)は Lasnik & Saito (1984: 245)の例文である。

PIC は、それに対しては意味をなさない。また、(1)で観察される wh 句の局所条件は、無差別束縛の分析では、主文の Q 形態素が wh 句を束縛した場合、埋め込み文の Q 形態素が空量化(vacuous quantification)を起こすため、wh 疑問文としての解釈は許されない、と言う形で説明できる。主文の Q 形態素には yes・no 疑問文用の形態素としてのオプションがあるため、(1)は yes・no 疑問文として文法的となる。加えて、従来 wh 島の条件の効果を示すとされてきた(5)のような文では、[6] wh 句が主文のスコープを取っても、間接疑問文としての解釈が残るため、wh 疑問文として(1)を解釈した場合に生じる不適格性は生じない。近年、(5)のような文は、wh 句が主文のスコープを取るための適切なイントネーションのもとで読まれれば、適格な文であると言う指摘がされている(Kitagawa2005 他)。

(5) ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの?

また、「かどうか」の省略形として「か」があるため(Tanaka1999 他)、(6)のような文では空量化は生じない。

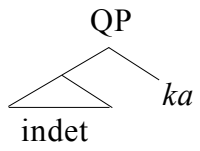
(6) ジョンは[メアリーが本を買ったか~~どうか~~]知りたがっている

埋め込み文の「か」が Q 形態素であるか「かどうか」の省略形であるかは、それが意味上「かどうか」と等価であるかどうか、と言うことが一つの判断の基準になるように思われる。

4.2. wh 句の構造

Kuroda(1965)以来、日本語の wh は未確定表現(indeterminate pronouns)と呼ばれ、選択される要素に応じて其の特性が決まることが観察されている。例えば、(7)で示したように、量化助詞の「か」に選択されると、「誰か」のように存在量化子になる。

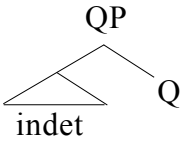
(7)



[6] (5)は Watanabe(1992: 257)の例文であり、そこで(5)は(?)とされている。

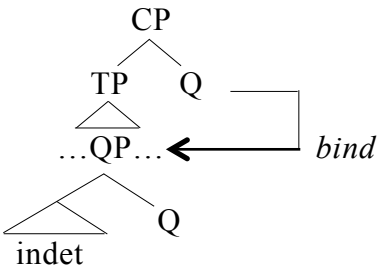
ここで、日本語の Q 形態素は wh 句の隣に基底生成され文末に移動する Hagstrom(1998)の提案を踏襲し、(7)で示した未確定表現と量化助詞の関係と同じように、未確定表現は Q 形態素に選択されることで wh 項に決定されると仮定する。

(8)



(8)の構造に加えて、wh 項がスコープを取る手段として、別の Q 形態素が CP の主要部に基底生成されると主張する。つまり、この Q 形態素の無差別束縛によって wh 項はスコープを取ることになる。

(9)



これに従えば、wh 項には移動が関与することがないため、結果として、(3)で島の制約の効果が現れることはない。また、形式素性は各言語の特定のコンテキストに応じて音形が付与される分散形態論(e.g. Halle & Marantz 1993)の語彙挿入(vocabulary insertion)をもとに、日本語において Q 素性が音形を受けるコンテキストは、CP の主要部であると仮定する。つまり、日本語で Q 素性が音形を受ける規則の一つとして、(10)が音韻部門に存在することになる。

(10) $[_{CP}$ Q] ↔ /no/

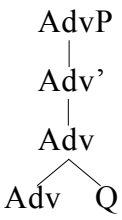
この条件により、QP 内の Q 形態素は発音されることはない。

一方で、wh 項とは異なり、wh 付加詞は副詞であるため、無差別束縛(もしくは量化)の対象にはならない。[7] ここで、wh 付加詞は Q 形態素がその主要部に付加する多

[7]「なぜ」が変項として扱えないことに関する議論は Tsai(1994)を参照されたい。

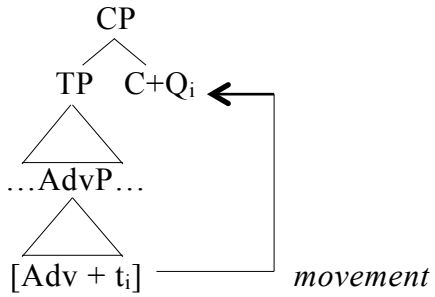
重主要部構造(multiple-headed structure)を持つと主張する。[8]

(11)



(11)の構造に対して、wh 項のように、別の Q 形態素を CP の主要部に基底生成するオプションは用いることができない。したがって、(12)で示したように、AdvP 内の Q 形態素が C へ移動し、その痕跡と演算子・変項の関係を持つことでしか wh 付加詞はスコープを取る手段がない。[9]

(12)



wh 項とは異なり、wh 付加詞は移動によってスコープを取るため(取る以外ないため)、(4)では島の制約の違反が生じる。

wh 項には無差別束縛を用いて、wh 付加詞には移動を用いることで、複合名詞句制約に関する非対称性を導く趣旨は、既に Tsai(1994)が提案した内容である。しかし、Tsai(1994)では wh 付加詞の LF 移動が仮定されている。3.で述べたように、移動なしの一致が可能になったことから LF 移動は破棄された(Chomsky2000 他)。したがって、Tsai(1994)の提案はその文法モデルとは相容れない。本稿の位置付けは、日本語の wh 句の構造を精密化し、Chomsky(2000)以降のミニマリスプログラムにおける Tsai(1994)の洞察の再定式化となる。

[8] 日本語の多重主要部構造に関する議論は Fukui(1999)や Takeda(1999)などを参照されたい。
[9] この構造で Q 形態素は wh 付加詞の主要部(の一つ)であるので、Q 形態素のスコープはそのまま wh 付加詞のスコープとなる。

5. 理論的示唆

Chomsky(2000)では、主要部移動は PF で起こると仮定されている。しかし、もし主要部移動が PF の操作であるならば、それは LF の内容であるスコープに関与しないはずである。wh 付加詞の Q 形態素の移動はスコープに直接関与するため、主要部移動は統語的操作であるという理論的示唆が得られる。

6. おわりに

本稿は、日本語の wh 構文は主として無差別束縛を用いていると主張し、wh 項と wh 付加詞の内部構造の違いから(スコープの取り方の違いから)、複合名詞句制約に関する非対称性を導いた。

7. 参考文献

Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*, Cambridge, Mass.: MIT Press

Chomsky, N. 2000. "Minimalist inquiries: The framework," In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge MA: The MIT Press.

Chomsky, N. 2001. "Derivation by phase," In *Ken Hale: A Life in Language,* ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. 2013 "Problems of Projection," *Lingua* 130: 33-49.

Fukui, N. 1999. "The Uniqueness Parameter," Glot International, 4:1, 26-27.

Hagstrom, P. 1998. *Decomposing questions*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Kitagawa Y. 2005**.** "Prosody, Syntax and Pragmatics of Wh-questions in Japanese," *English Linguistics* 22.2, 302-346

Halle, M and A Marantz. 1993. "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," In *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 111-176, Cambridge, MA: MIT Press.

Huang, J. 1982. *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Kuroda, S.-Y. 1965. *Generative grammatical studies in the Japanese language*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Lasnik, H and M Saito. 1984. "On the Nature of Proper Government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.

Nishigaichi, T. 1990. *Quantification in the Theory of Grammar*, Dordrechit: Kluwer.

Pesetsky, D. 1987. "Wh in situ: Movement and unselective binding," In *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric Reuland and Alice Ter Meulen, 98–129, Cambridge, Mass: MIT Press.

Rizzi, L. 1990. *Relativized Minimality*, Cambridge MA: The MIT Press.

Saito, M. 2004. "Some Remarks on Superiority and Crossing," In *Generative Grammar in a Broader Perspective*, ed. by Hang-Jin Yoon, 571-595, Hankook, Seoul.

Takeda, K. 1999. *Multiple Headed Structures*, Doctoral dissertation, University of California, Irvine.

Tanaka, H. 1999. "LF wh-islands and the Minimal Scope Principle," *Natural Language & Linguistic Theory* 17, 371-402.

Tsai, W.-T. D. 1994. *On Economizing the Theory of A'-Dependencies*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Watanabe, A. 1992. "Subjacency and S-structure movement of *wh-in-situ*," *Journal of East Asian Linguistics* 1, 255-291.

渡辺明. 2005. ミニマリストプログラム序説. 大修館書店.